出会い（19）

若き日の恩師を偲んで

ー神の逆風ー

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

「よき友は千金の宝」「よき師は道の光り」といわれる。すでに長い人生となれば多くのことが忘れられてしまうだけに、そこに残る思い出は、夕べの空に光る金星のように美しい。今また、ここで思い起こすのも、若き日に出会った三人の師である。というのも、その三人の師とのかかわりのなかで一つのことが共通していることが、今なお不思議だからである。これまでに、本誌のなかで数回にわたり、若き日のドラマをかなり詳細に書かせていただいたが、そこに一貫する空白の部分が今なお気になっている。時に、それに気づかれた読者からのご質問も届けられた。たしかに、その時の私の、「魂の遍歴」の底を流れていた「地下水」にでも例えられる「隠れた神との出会い」のようなものがあったと思われる。空気のようにつかみにくいもの、しかし、たしかにあるもの。言葉にならぬ「沈黙の逆風」がある。禅で「大疑団」というほどのものではないが、言葉にならぬ沈黙の重みを感じさせられる。その説明はかえって、読者の問いにさらに覆いをかけてしまうかもしれない。大きな城門の狭い脇門ぐらいにもなれば幸いである。ともあれ、すでに半世紀をさかのぼる遠い青春時代のことである。焦点を定めて筋を追って行くつもりだが、時に話の筋が前後したり、重複しても悪しからずご了承のほどを。

1．ナーベルフェルト師（1897-1979：神言会司祭）

『沈黙と不在』

（「出会い4」 VITALITE Vol.26）

私が、新約聖書を手にしたのは、旧制一高に入学して数ヵ月した時であった。独文専攻科に属していたので、著名なゲーテの名劇「ファウスト（FAUST）」などの講義を通して、その時から聖書に興味をもち始めていた。しかし、新約聖書の冒頭マタイ福音書二章を読むだけでがっかりした。このしょっぱなからの聖書の躓きを疑問にもったまま、ナーベルフェルト師と出会ったのは、戦後まもなくのことであり、東京高円寺地区の青年会で始められた聖書研究会であったこともすでに述べたが、その後、東京郊外吉祥寺にあったナーベルフェルト師所属のカトリック修道院に移って集会を続けた。それからは、ますます、反聖書、反キリスト教、反カトリックの論文作成に熱中し、毎日のように修道院に通った。朝9時から夜9時まで、部屋にいり浸って論文を書き続けた。夕方の小一時間は、ドイツ語勉強を兼ねて神学討論の継続という変わらぬスケジュール。週の聖書研究会も欠かさず集まり、東大仲間といっしょに反キリスト論に大いに気炎をあげていた。ところで、妙なことに、そこに一度もナーベルフェルト師は出てこられなかった。その頃は、以前にも書いたように、東大の法学部の講義にはまるで欠席。熱心に出たのは文学部の講義ばかり。それに教会や修道院での講義らしきものを聞いたこと全くなし。いずれにあっても全く落ちこぼれ。しかし、今もって不思議なのは、ナーベルフェルト師の沈黙と不在。なぜ? どうして? それはなんであったのか? 今もって不明。

2．中川宋渕老師（1907-1984：臨済宗龍澤寺）

『洗礼を受けなさい』

（「出会い6」 VITALITE Vol.28）

宋渕老師にお会いしたのは、東京駒場の旧制一高に入学まもない頃。その年の末、12月8日には日本の世界大戦参加宣言、ただちに、パールハーバー襲撃の成果が大きく報道された。しかし、開戦初期の輝かしい戦勝機運もまもなく、米国の逆襲にあって、たちまち戦況は全面的に危機状態に陥った。そして遂に、続く年1943年12月1日に「学徒出陣」の緊急至上命令が公布された。そのため、先輩でもある老師の禅指導は1年半に短縮されてしまったが、構内の奥に建てられた「三昧堂（ざんまいどう）」と名づけられた禅堂で、毎月の13日に三島の龍澤寺より足を運び後輩の指導に当たってくださったので「十三日会」と名づけられていた。当時、二百年に一人の傑僧とまでいわれた龍澤寺管長山本玄峰老師も折々同行して指導してくださっていた。しかし、この幸いな時期は中断され、それから、

終戦後復員するまでの1年9ヵ月が過ぎ去った。当時の凄まじい軍隊生活については今書く余裕はない。とにかく、原子爆弾の広島と長崎の投下によって歴史上始めての惨敗に帰した。その後まもなく、東大法学部に復学しながら、思いがけぬ運命の嵐に巻き込まれてしまったことも、読者はすでに本誌を通してご存じのことと思う。その時の三島の龍澤寺の一夜は、宋渕老師の一言によって、私の生涯を全く変えてしまった。

「あなたは、今、キリスト教をよく分かったと思う。しかし、まだ、頭でしか分かっていない。体で分からなければ駄目だ。そのためには、洗礼を受けなさい」

まさに、「神の逆風」とでもいうのか、その時の老師の落雷のような言葉は今なお、言葉なき大音声となって私の耳朶に響いている。まさに青天の霹靂!「不知の大公案」であった。その時刻は、1948年6月28日の夜9時頃。ところで、それから少し前、夕暮れの5時、突然北陸の福井大地震が起きたことを知ったのは、廊下で座禅をしながら老師の帰りを待っていた時のことであった。二つの出来事は、事柄こそ違え、その時の私にとっては相重なる一つのことであった。そこで忘れられないことというのは、福井の郊外にある曹洞宗本山永平寺の創始者、道元禅師の著書『正法眼蔵』は、その頃、肌身離さぬ愛読書であったからである。永平寺の被害は比較的大きくはなかったようだが、入り口の大門の石塔が倒れたということだった。偶然とは済ませられない、なにか私の運命を指し示すものがあるように思えた。

3．下山正義師（1910-1996：カトリック司祭）

『子供教室』

（「出会い7」 VITALITE Vol.29）

上記のような宋渕老師の力強い勧めの言葉、それに覆いかぶさる福井大地震に突き飛ばされたショックに耐えながら、翌朝、老師と暁天座禅を共にしてから暇乞いをした。「洗礼を受けよ」という老師の言葉は動かない岩盤のようであった。それから数日後のある日、街中を歩いていた時、ふと、耳元で「教会に聞け」という声が聞こえた。それも、はっきりと澄んだ声だった。それからしばらくして訪ねたのが大森カトリック教会。出てこられたのが、主任司祭下山正義神父。洗礼の希望を伝え、その準備の勉強を願った。「よし、分かった」のひとことで、次の日から教会に通うことになった。ところで、その勉強は小学生10名あまりの「子供教室」であった。騙されたような憤懣よりも、呆気にとられて何度も聞いているうちに、まだ幾つも頭にこびりついていた難問が不思議に解けていった。思えば、下山神父は最初からその意図であったらしい。まさに「われらのおやじ」と渾名された下山神父であった。「蝮の裔よ回心せよ」と、肩を叩かれたことは、洗礼によって、神の子となるための謙遜を教えられたのであろうか? にしても、今もってよく分からない。

以上三人の恩師に共通していたことは、常識を超えるというか、人間の思惑を吹き飛ばす「霊の逆風」のような体験であった。そこには、地底に落ちた哀れな私への手放しの愛と信頼があった。大地が揺れ、天が真暗になったその時に、神に行く道を、貧しい私に拓いてくださった方が、私の先人であり、尊い恩師であった。

表紙の写真

写真：クリス・スティール＝パーキンス
バングラデシュ、1989年

バングラデシュの夏は暑い。水自体は豊富な国だが、飲用に適した水は不十分だ。雨季、バングラデシュでは家が水浸しにならないよう、家を高くするための盛り土を掘る。掘ったあとにはため池ができ、人々はそのため池の水を飲んで渇きを癒した。しかし、ため池の水は塩分が多く、おいしいとはいえない。
そこで先進国の支援のもと村に井戸が掘られた。ポンプの一押しで、いくらでもおいしい水が汲み出せる。

井戸は人々に喜びと安息をもたらした。
しかし度重なる洪水は幾度も井戸を破壊し、濁流が井戸を呑み込んだ。そして、無秩序な地下水の汲み上げは、水位の低下を招き、井戸を枯らした。

つかの間の豊かさを暗示するように、パーキンスの視線は人々を通してどこか遠くをみつめている。